

元北方総監千葉徳次郎陸自77著
『国の守りと自衛官の矜持』

柴田 幹雄 陸自75

米国製の日本国憲法に存立根拠を持たず、自衛隊と呼ばれても期待されるのは軍と同様の国家防衛である。一方国外へ出れば自衛隊は軍隊であるという。自衛官は自己認識をどのように持つべきか。家族に自分の仕事をどう理解してもらおうのか。

後輩自衛官たちをこよなく愛し、各地で公演、講話をして語りかけてきたことを元に本書は書かれています。その底辺に流れるのは自衛官としてどうあるべきかという千葉イズムであろう。

内容は、国を守るとはどういうことかから始まり、国の守りの歴史について万葉集にある防人の心を紹介し、蒙古襲来に奮戦した鎌倉武士について触れ、明治以降の軍人の守りについて記している。

米軍占領政策で精神的武装解除をされた日本における国防、安全保障に対する偏見、これらが自衛隊の誕生、発展に与えた歪みについてわかりやすい言葉で説明している。

一方、自衛隊が経験した災害派遣や、国際協力活動、特に湾岸戦争の多国籍軍への協力では血と汗を流す覚悟がなければ国際社会で軽蔑されることが国民に理解されはじめ、雲仙普賢岳の活動では「命より重いものがある」という感動的な言葉も隊員に捧げられた。今や最も信頼されているのは「自衛隊」なのだ。

自衛官はどのような心構え、行動規範で身を処すべきか、「隊員の心に隙はないか」「国民との間に隙はないか」「主権国家における憲法改正」など若い自衛官はぜひ本書で学んでほしい。

また幹部自衛官にとっては「状況判断と自己責任」で、著者が北方総監として東日本大震災に際し採った判断・決心について記述があり極めて興味深い。各級指揮官・付幹部で精神教育を行う参考書として大いに有益であり、お勧めしたい。

(明成社 900円＋税)

